

令和元年6月29日現在

機関番号：34439

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11650

研究課題名(和文) 大腸がん組織型検診に向けた受診行動支援プログラムの有効性の検証

研究課題名(英文) Inspection of the Efficacy of the Screening Behavior Support Program for Colorectal Cancer Organized Screening

研究代表者

藤原 尚子 (FUJIWARA, NAOKO)

千里金蘭大学・看護学部・教授

研究者番号：90469544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大腸がん好発年齢者の検診に関する意識の特徴と変化および受診歴について、介入群と対照群と比較し受診行動支援プログラムの効果を検証することを目的とする。アンケートは、介入群で「他のがん検診の項目と一緒に検査できる」、「大腸がんが増えていると聞いている」が男性より女性が有意であった。年代別では2項目が60歳以下で有意であった。アンケート項目の上位3位は「大腸がんは早期発見が大切である」、「大腸がん検診を受けた結果で安心できる」、「大腸がんは死ぬ病気なので検査が大切である」であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大腸がん検診の受診行動支援プログラムは、受診者の特性を考慮したアプローチの選定が可能となる。本プログラムの具体的な内容は、大腸がん好発年齢者へ受診行動に必要な情報提供と教育的な関わりである。個別対応アプローチは受診者にとって満足度の高い支援が可能となり、包括的なマネジメントにもつながるため、大腸がん検診の受診率の向上が期待できる。したがって、本プログラムの有効性の検証により国内全域での応用、継続的な実践が可能となる。本プログラムが、国内の多くの自治体に普及されることで、日本における大腸がん検診の受診率の向上と死亡率低下が期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study to verify the effect of colorectal cancer screening behavior support program on the consciousness of the colorectal cancer advanced age people, by comparing questionnaire responses between the intervention group and the control group of 59 subjects older than 40 years.

In the intervention group, the women were superior to the men on the items of "I have the test, because the test can check some items other than occult blood" and "I have the test, because the morbidity of colorectal cancer is increasing". On these two items, the subjects under 60 years old were superior than others. The items of "I have the test, because early detection of colorectal cancer is important", "I have the test, because I am relieved from the result of the test" and "I have the test, because colorectal cancer is a disease causing death", were top three selected by many subjects.

研究分野：臨床看護学

キーワード：大腸がん検診 受診行動支援プログラム Organized Screening アンケート調査

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

日本では、がん死亡割合が全死亡の 28.8%を占め死因順位の第 1 位である<sup>1)</sup>。そのうち毎年約 10 万人以上の人新たに大腸がんを診断され、部位別がん死亡数では、女性は 1 位、男性は 3 位と上位を占めており<sup>1)</sup>、大腸がん検診の重要性が高まっている。日本は世界の先進国において大腸がん死亡率が上位であり、検診受診率は男女共に諸外国に比べ低い<sup>2)</sup>。都道府県格差が大きい現状である<sup>2)</sup>。したがって、対象と年齢、検診方法、検診間隔や対象となる集団の限定、がんの罹患や死亡を把握、実施および診断や治療をチームで行うなど体系的な管理システムである組織型検診の導入が重要となる。

### 2. 研究の目的

(1) 大腸がん検診に関する面接調査と意識調査から、検診の受診歴および未受診の理由について明らかにする。

(2) 研究者らが先行研究で開発した大腸がん組織型検診 (Organized Screening) に向けた受診行動支援プログラム (以下、プログラムとする) を実施しその有効性を検証する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 2015 年度

大阪府内に在住する 40 歳以上で、前年度の大腸がん検診未受験者 59 名のうち介入群の 30 名を対象として、意図的対象者選択方法を用い検診受診歴から未受診者の抽出し面接調査を行い、平行して逐語録の作成も行った。調査は研究者の所属機関の疫学倫理審査委員会の承認を得て行った。

#### (2) 2016 年度

大腸がん検診に関する意識や行動について、研究者代表者らの先行研究<sup>3,4)</sup>にもとづき作成した自記式の質問紙を使用し、介入実施前の意識調査を行った。受診勧奨の介入として、大腸がんの病気や検診に関する知識の提供などパンフレットの作成を行った。

#### (3) 2017 年度

介入群の未受診の理由について、面接調査の結果を基に個別対応アプローチを選定し面接調査と大腸がん検診に関する意識調査を介入前と介入後で行った。介入群に対して個別対応アプローチの選定と大腸がんの病気や検診に関する知識の提供、パンフレットの郵送、電話相談、個別面談などによる受診勧奨を行った。

#### (4) 2018 年度

受診行動支援プログラムに関する評価について、面接調査と大腸がん検診に関する意識調査の介入前と介入後に行った結果を基に、大腸がん組織型検診に向けた受診行動支援プログラムの有効性について検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 2015 年度研究成果

面接調査のインタビューガイドを作成し、介入群 30 名と対照群 29 名の面接内容を基に個別に対応したプログラムを考案した。

#### (2) 2016 年度研究成果

介入実施前の意識調査を実施した。介入実施前の意識調査の回収率は 100%であった。介入群と対照群の介入前後における各変数 (受診率・受診に対する意識) の変化について検討した。また検診未受診者に対して、大腸がんの病気や検診に関する知識の提供、パンフレット作成など受診勧奨に関する介入を選定した。

### (3) 2017 年度研究成果

介入前の面接調査と大腸がん検診に関する調査の結果から、大腸がん好発年齢者の検診に対する意識の特徴について明らかにした。「がん検診は無料や補助がある」、「他のがん検診の項目と一緒に検査できる」の項目で男性より女性が高かった。「年齢的にがんになりやすいと思う」、「大腸がんは自己検診（自分でみてチェックする）ができないので早期の受診が難しい」、「大腸がんが増えていると聞いている」の項目で60歳以上が高かった。このほか、家族背景や経済的問題が影響していることが明らかになった。

### (4) 2018 年度研究成果

面接調査と大腸がん検診に関する意識調査の介入前と介入後に実施した結果を基に、大腸がん組織型検診に向けた受診行動支援プログラムについて検討した。対象者の平均年齢は、男性が23人(63.43±9.62歳)、女性が36人(60.42±9.91歳)であった。介入後の回収率は81.4%(介入群は76.7%、対照群は86.2%)であり、受診歴と性別・受診歴と年代・受診歴と家族背景において介入群と対照群で有意差はなかった。アンケート項目では、介入群で「他のがん検診の項目と一緒に検査できる」、「大腸がんが増えていると聞いている」で男性より女性が有意であった。また、項目ランキングでは「大腸がんは早期発見が大切である」、「大腸がん検診を受けた結果で安心できる」、「大腸がんは死ぬ病気なので検査が大切である」が上位であったことなどが明らかになった。

### (5) 総括

本研究を通じて、受診行動支援プログラムは大腸がん検診への意識づけの継続と大腸がんの早期発見に有用であることが示唆された。

### <引用文献>

- ① 厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課、平成25年人口動態統計(確定数)の概況、人口動態統計年報、2013、15-18
- ② 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報サービス(2013)、  
[http://ganjoho.jp/professional/statistics/statistics.Pref\\_Cancer\\_Screening\\_Rate\(2007\\_2013\).xls](http://ganjoho.jp/professional/statistics/statistics.Pref_Cancer_Screening_Rate(2007_2013).xls)、2014、10.5
- ③ 藤原尚子、花木啓一、平松喜美子、大腸がん早期発見のための便観察習慣化に向けた行動変容支援プログラム、米子医学雑誌64(1)、2013、22-31
- ④ 藤原尚子、稲垣美紀、大腸がん好発年齢者の大腸がん検診における受診行動に影響する要因、第33回日本看護科学学会学術集会講演集、2013、394

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- ① 藤原尚子、大腸がん組織型検診に向けた受診行動支援プログラムについて、*BIO Clinica*、査読有、33巻2号、2017、pp.42-45
- ② Naoko Fujiwara, Miki Inagaki, Hiroshi Ota, Kenyu Yamamoto, Masahiko Kiyama, Research on Consciousness of the Colorectal Cancer Screening, *BIO Clinica*、査読有、33巻6号、2018、pp.93-96

[学会発表] (計2件)

- ① Naoko FUJIWARA, Miki INAGAKI, Hiroshi OOTA, Kenyu YAMAMOTO, Views of cancer predilection age people on colorectal cancer and the screening, 21st EAFONS & 11th INC (21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences)、2018
- ② Naoko Fujiwara, Research on Consciousness of the Colorectal Cancer Screening in Japan, IUPESM 2018 (World Congress on Medical Physics & Biomedical Engineering)、2018

[図書] (計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：稲垣 美紀

ローマ字氏名：(INAGAKI, miki)

所属研究機関名：摂南大学

部局名：看護学部看護学科

職名：准教授

研究者番号 (8桁)：60326288

研究分担者氏名：山本 兼右

ローマ字氏名：(YAMAMOTO, kenyu )

所属研究機関名：公益財団法人大阪府保健医療財団大阪がん循環器病予防センター

部局名：予防推進部・循環器病予防検診部

職名：技師

研究者番号 (8桁)：40745486

研究分担者氏名：大田 博

ローマ字氏名：(OTA, hiroshi)

所属研究機関名：四條畷大学

部局名：看護学部看護学科

職名：講師

研究者番号 (8桁)：10739775

研究分担者氏名：木山 昌彦

ローマ字氏名：(KIYAMA, masahiko)

所属研究機関名：公益財団法人大阪府保健医療財団大阪がん循環器病予防センター

部局名：予防推進部・循環器病予防検診部

職名：副所長

研究者番号 (8桁)：10450925

研究分担者氏名：北尾 良太

ローマ字氏名：(KITAO, ryota)

所属研究機関名：千里金蘭大学

部局名：看護学部看護学科

職名：講師

研究者番号 (8桁)：30505095

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。